

表象文化論学会第5回大会 シンポジウム・公演・研究発表 概要

2010年7月3日（土） 青山学院アスタジオ地下多目的ホール

第I部 シンポジウム

12:30-15:00 シンポジウム「現代日本文化のグローバルな交渉」

【パネリスト】内野儀（東京大学）、住友文彦（キュレーター）、ジャクリーヌ・ベルント（京都精華大学）、松井みどり（美術評論家）

【司会】加治屋健司（広島市立大学）

本シンポジウムは、現代日本の文化の動向を、海外におけるその受容と理解、そして、海外の文化の動向との関わりも参照しながら、検討する。ヨーロッパやアメリカ、そしてアジアにおいて、現代日本の文化は、展覧会や公演、出版物などを通して紹介され、流通し、解釈されてきた。海外との文化的交渉に携わってきた批評家やキュレーター、研究者を迎えて、現代日本の文化の動向を、日本国内の展開や言説だけでなく、グローバル化した時代のハイブリッドな文化状況との関係において、議論する。さらに、こうした状況における文化的差異に対して、どのような理論的な視点を持ちうるのかについても、あわせて考察する。

第II部

16:00-17:00 Lonely Shakespeare Drama 「超訳 間違いの喜劇」

【出演】楠美津香

楠美津香（くすのき・みつか）。コントユニットや放送作家などの活動を経て、90年代には「女性ひとりコント」のスタイルを確立。代表作は「東京美人百景」。国立演芸場花形演芸会銀賞受賞（1992年）、同花形新人大賞特別賞受賞（1994年）。2000年からはシェイクスピアの全作品をひとりで上演する「Lonely Shakespeare Drama」プロジェクトを始動。ギャグとシモネタに満ちあふれた大衆演劇としてシェイクスピアを全国各地で上演。2010年7月現在、『恋の骨折り損』と『テンペスト』を残すのみとなり、年内に全37世界を掌握予定。2組の双子を1人で演じる今回の『超訳 間違いの喜劇』は、2008年5月に初演された。

7月4日（日）東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム

10:00-12:00 研究発表（午前）

研究発表1：包含と排除——中世から現代にいたる表象文化の三つのケース

2010年に映画の主題ともなった「狼男」とは、本来、法の保護外に置かれるばかりか、文化の埒外にまで追い立てられた悪辣な狼藉者を指し示す名称であった。この事実注目したアガンベンが示したのは、「動物と人間、ピュシスとノモスのあいだを移ろいゆく関（ソリア）」としての存在であり、包含と排除のあいだの不分明な境界線としての様相であった。主権がひとつの規範をあまねく適用しようとするれば、その規範が適用されない例外の場が必然的に要請されるのである。では、包含的排除ともいふべき作爲的な操作によって生み出されるこの政治的時空は、これまでいかに表象されたのだろうか。

本パネルは、こうした問題意識にのっとり構成される。すなわち、不可能性と可能性、不可視と可視、裁断と縫合が並存するパラドキシカルな場としての表象を、三つの視点から検証する試みである。河田は、中世美術における図像のひとつの類型から、慈悲と庇護を欲する心性が生み出した例外の空間を分析する。杉山は、ルネサンス宗教劇における一連の登場人物に注目し、世俗と宗教というふたつの圏域のあいだをよりしろとする存在を検討する。石谷は、現代芸術において再現されたある近代の神話を通して、「場なき場」へと寄り添うための、戦略的な身振りの可能性を論じる。これら三つの発表の交差から、現在、政治の唯一の賭け金ともなった「生」が未完結な場として立ち上がるだろう。

脇役たちの「場なき場」——15世紀フィレンツェの聖史劇より／杉山博昭（日本学術振興会）

本発表は一五世紀フィレンツェにおける聖史劇の上演台本を取り上げ、そこに現れる「場なき場」の政治的性格を分析する。

旧約や新約、そして聖人伝に範をとり、聖なる出来事を「記念」する聖史劇の各演目は、第一義としてカトリック的表象であった。また同時に、在俗信徒会の会員の「演技」を通して、都市の社会的結合の確認と強化を図るといった共同体的表象でもあった。聖史劇のこうした特徴は、たとえばフィレンツェの守護聖人を奉る「洗礼者聖ヨハネのフェスタ」などの上演機会に際だって前景化する。つまり、宗教的圏域と世俗的圏域が折り重なった祝祭の時空に、聖史劇は展開したのである。

しかし、予言と成就の物語を紡ぐ上演台本のテキスト、詩節やト書きの記述を精査すると、このふたつの圏域からこぼれ落ちる存在が浮かび上がる。それは、主だった登場人物のすぐ脇に配された百人隊長、異教神、レプラ患者、そしてユダヤ教徒たちである。祝祭の時空という「あべこべの世界」にあるにもかかわらず、日常で被りつづけた疎外になおも囚われる脇役たちの表象は、「記念」と「演技」のいずれからも排除／包含される場の座標を指し示す。つまり聖史劇の舞台上において、「場なき場」に立ちつくしたユダヤ教徒たちは、一五世紀の宗教的圏域と世俗的圏域のそれぞれの臨界点を構成し、ふたつの圏域を並存せしめた点において、優れて政治的な機能を帯びていたと言えるのである。

救済のポリティクス——ペスト流行期の《慈悲の聖母》にみられる救われざるものたち／河田淳（日本学術振興会）

中世やルネサンスの造形作品には、現世の生や死後の魂が安らかに過ごせることを保証されたいという、安心や安全に対するひとびとの欲求をみることができる。このようにいくつかの作品から当時の心性を分析したのは、アナール学派第三代に位置づけられるジャン・ドリュモールであった。本発表では、このドリュモールが安心・安全を求める心性に裏打ちされた図像として触れた《慈悲の聖母 *madonna della misericordia*》を取り上げ、とりわけペスト流行期にみられる、この図像の一類型を考察する。

この図像は、両手でマントを広げて左右に跪く信徒たちを囲い込み、庇護を与える慈悲深い聖母の姿を表わしたもので、十三世紀ごろからイタリア、フランスを中心に幅広く用いられてきた。また、ヨーロッパ各地でペストが流行した時期には、神の母たるマリアの慈悲は「神罰」であるペストをも退けうると考えられたことから、□慈悲の聖母□図像はペスト除け機能をもつものとも考えられた。この時期に制作された作品のなかには、庇護のマントのなかで守られる人々と対照的に、息途絶えた人々をマントの外に配するタイプがみられる。これは、マントの内側の安全性を強調するために、その外側をより脅威に満ちた空間として演出する必要があったからと考えられる。さらには、マントの内側であっても人物の位置や大きさに一様でないのは、慈悲を受ける序列が表わされているからと捉えることができる。

このように、安心・安全を求めて制作された「慈悲」という名を冠した図像にも、包含と排除、さらにはその二項だけでは論じきれない権力構造のグラデーションが介在しているといえるだろう。

二つのメデューズ号 ——ジェリコーとショニバレのあいだ／石谷治寛（龍谷大学）

イギリス生まれのナイジェリア系アーティストのインカ・ショニバレ MBE は、個展「プロスペローの怪物」（二〇〇八年）で、《ラ・メデューズ》と題され彫刻と写真で構成された二作品を発表している。これは、啓蒙時代の著述家の形象とゴヤの素描の活人写真とともに展示されて、近代芸術を独特の衣装で着せ替える試みとなっている。だが、なぜ「メデューズ号」なのだろうか。西欧からアフリカに向かう途上で座礁した新聞の三面記事の事件は、ジェリコーの大作によって近代の神話へと高められた。というのも、この表象は、主題の面でも、それが芸術界に拒絶され受容されるプロセスにおいても、「包含と排除」の近代的パラドックスをこれ以上ないほどに具現化していたからである。

本発表では、「メデューズ号」をめぐる美術史研究と現代アーティストの戦略との視差を通して近代の神話を再考する。ロココや近代の表象の再解釈に取り組むショニバレはその「たわいなさ[Frivolity]と陽気さ[playfulness]」に着目する。これは、ジャック・デリダによって試みられた古典主義から近代へと移行する人文学の脱構築的な読解に対応している。二つの「メデューズ号」をめぐる解釈のゲームは、現代のグローバル化を可能にしている知の空間の起源へと遡り、反復し、分析し、交易し、縫合し、裂け目を開き、そして「解体のためのスイッチ」として作動しはじめるだろう。

【コメンテーター／司会】阿部成樹（山形大学）

研究発表2：残存する「オペラ」——1910～20年代、ポスト・ヴァーグナーの行方

オペラというジャンルは、19世紀後半のヴァーグナーによるオペラという呼称の放棄、1920年代に音楽雑誌を賑わせた「オペラの危機」論争から戦後のブーレーズによる「オペラ劇場を爆破せよ」というアジェンダに至るまで幾度も危機を警告されてきた。岡田暁生が「第1次世界大戦後の20世紀大衆社会の到来とともにその歴史的使命を終えた」（『オペラの運命』）ジャンルとしてオペラを定義づけ、R.シュトラウスにその残照を見出しているのも一定の妥当性を持っている。

しかし、世紀転換期前後のメルヘンオペラ、文学オペラ、ドビュッシーの《ペレアスとメリザンド》（1902）などの「ポスト・ヴァーグナー・オペラ」（ダールハウス『19世紀の音楽』）を経てもなお「オペラ」という呼称をもつ作品は創作され続けた。東欧諸国の自国語オペラや時事オペラなど、録音技術や映画の発展により生じた大衆文化、政治的状況の変化、音楽や他ジャンルの前衛運動との関係を通じて形態を多様化させた1910～20年代のオペラは、1つのジャンルに括ることが困難なほどの様相を呈している。

それらの作品がなぜ「オペラ」という名を冠して創作され、受容されたのか。この問いを、それぞれの事例研究において音楽とテキストの関係を中心に検討することで、20世紀初頭の社会的、歴史的、美学的問題の中に残存する「オペラ」の布置を浮かび上がらせることが本パネルの課題である。

魂の対話を自国語で歌う——《青ひげ公の城》における象徴主義と文化ナショナリズム／岡本佳子（東京大学）

バルトーク作曲、バラージュ原作《青ひげ公の城》（1911）は、ブダペシュトで開催された二つのオペラコンクール用に作曲された。しかし審査員から「まるで上演に不向き」と評されたように、本作品は男女2人の対話のみで構成される、劇的効果の少ない、およそ「オペラ」らしからぬ作品であった。

本発表では、なぜこのような作品が制作されたのかという問いを念頭に置き、二つの側面——作品における象徴主義、制作当時のハンガリーにおける文化ナショナリズム——に注目して分析を行う。そして本作品を、ヴァーグナーの楽劇志向から象徴主義を経由し、世紀転換期ハンガリーにおいて成立した、オペラの一つの終着点として捉えることを試みる。

バルトークは作曲にあたって、血や涙といった言葉に呼応するモチーフを登場人物の感情に広く結びつけ、音楽における象徴を巧みに利用している。これによって、韻文によって禁欲的に作られたバラージュのテキストの「魂に音楽的形式を与え」（バラージュ）、さらに音楽による新たな解釈も提示している。一方で、こうした言葉と音楽の作用を考える際、国内における文化的背景を無視することはできない。ハンガリーではモダニズム運動においても、芸術家による社会への参画が意識された」と指摘されている（フリジェシ）。本作品は、民話の言い回しや民謡の音楽語法の利用を通して新たな自国語オペラを制作する、作者2人の試みの結果でもあったのである。

目に見える音楽——クルト・ヴァイル《プロタゴニスト》、《皇帝は写真を撮らせたもう》における舞台の音楽とピットの音楽／中村仁（桜美林大学）

ドイツの作曲家クルト・ヴァイルと劇作家ゲオルク・カイザーによる一幕オペラ《プロタゴニスト》（1926）と《皇帝は写真を撮らせたもう》（1928）は、作曲者自身が合わせて一晩で上演することを望んだ2作品である。《プロタゴニスト》では劇中、8人の管楽器奏者が舞台上に登場し、パントマイムの伴奏のために大公より派遣された音楽家として演奏するのであるが、それ以外の部分で奏者達はピットのオーケストラと共に演奏し、最後にピットに歩いて戻るよう指示されている。一方《皇帝》では、シルクハットをかぶり白い顎鬚をたくわえた老人に扮した男声合唱がピットに配置され、舞台上の出来事にコメントを加える役割を果たす。さらにドラマの終わりにおいては舞台上のグラモフォン（蓄音器）によってタンゴが奏でられる。

「オペラ」において台詞が歌われ、音楽がつけられていることは自明のことであった。しかしヴァイルは音楽（家）の存在を可視化し、舞台とピットの境界をあやふやにすることで、ドラマにおいて音楽が存在していることの不自然さを強調する。師のブゾーニのオペラ論や、同時代の様々な新しい「オペラ」創

作との関係の中で、これまで《三文オペラ》(1928)に代表されるブレヒトとの共同作業において確立されたソング形式、叙事的音楽劇の前史的な作品としてしか見られてこなかったこれらの作品が、「オペラ」における舞台表象に対して投げかけていた問題を明らかにさせたい。

世俗的な完成品——シェーンベルク的一幕オペラ《今日から明日へ》／白井史人（東京大学）

本発表は、シェーンベルクが12音技法に基づく音楽を用いた一幕オペラ《今日から明日へ》(1928/29、台本：ゲルトルート・シェーンベルク)を取り上げる。名前を持たない夫婦がひき起こす一夜のささいな軋当てを描き出し、クシェネク、ヒンデミットなどの時事オペラの流れで理解されてきた本作品を、シェーンベルクの創作史、同時代のオペラの創作・受容との関連から再検討することを課題とする。

まず1920年代の「オペラの危機は存在するか？」という雑誌取材への彼の解答を出発点として、本作品が持つヴァーグナー的な理念や同時代のオペラ創作に対するアイロニックな効果を指摘する。次に、「モノドラマ」、「音楽つきドラマ」などの呼称で創作された《期待》(1909)、《幸福な手》(1913)などの初期作品群との比較を行う。具体的には「テキストとの関係」で「冒頭の言葉の響き」に触発されて進行すると述べられている歌曲創作法に対して12音技法の導入が与えた変化を、《今日から明日へ》のスケッチと『シェーンベルク全集』の「校訂報告」に基づいた成立過程の解明と音列分析を通して検討する。そして、『聖書の道』(1927)から「聖なる断片」(アドルノ)と評された未完のオペラ《モーゼとアロン》(1930/32)へとユダヤ教的色彩を強めていくシェーンベルクの創作の流れと比較することで、彼が唯一完成させた「オペラ」作品の世俗性が持つ戦略と意義が明らかになるだろう。

【コメンテーター】長木誠司（東京大学）

【司会】竹峰義和（日本大学）

研究発表3：来るべき〈エコノミー〉の構想——経済の時間と人間の時間

「生」に奉仕すること、自己の生を進んでデザインし、豊かにし、できるだけ延命させること——、個々の生がこのように「営まれる」ことは、単なる経済の仕組みを越えた「資本主義」という一つの体制においてははっきりと推奨されているように思われる。だが、個体の関心がすぐさま自らの「生」へと向かうよう促される一方、20世紀前半と終わりにそれぞれ発展したマス・メディアとデジタル・テクノロジーにより、個別の認識や経験がメディア環境、技術環境の内にあらかじめ取り込まれ管理される傾向はさらに強まっている。それが意味するのは、自己の「生」を富ませようとする個々の活動が、かえって固有性を欠いた付和雷同の群れの再生産へと収束するという事態である。

本パネルは、個体を「生」へと向かわせつつその固有性を譲渡させるこの巨大な生産・配分・管理の循環を複数の視点から問題化することを通じ、この〈エコノミー〉の内に置かれた「人間」が、なおどのような（不）可能性であるのかを問うてみたい。

谷島はスティグレールの技術哲学を通じて、コミュニケーションやネットワーク技術の飛躍的な発展をむしろ「特異性のエコノミー」へと繋げる可能性を検討する。大池はバタイユの「一般経済」をボードリヤールの消滅の思想により再解釈し、「生」を至上価値とする思考そのものの可逆性について論じる。荒谷はラカンの哲学的再読によって資本主義固有の「ディスクール」の姿を分析しつつ、その構造に変化・転換をもたらす契機について考察する。

スティグレールのメディア・コミュニケーション論——意識と特異性をめぐって／谷島貫太（東京大学）

テクノロジーに徹底的に取り巻かれた現代にあつて、「私」と世界の「特異性 *singularité*」を思考するにはテクノロジーから出発せねばならない。この点でベルナルド・スティグレールは、デリダが『グラマトロジーについて』で展開させた痕跡論を技術論として継承することで、この課題に応えようとしている。ただしデリダの場合とは異なり、そこではテクノロジーを通して構成される意識の在り方が問題となる。本発表はスティグレールの哲学を通じて、メディアが意識の流れを占拠することで生み出される画一的な「みんな On」を、再び「個」へと向かわせるプロセスの条件について論じる。

スティグレールはシモン・ドンの「個体化 *individuation*」や「横断-個体化 *trans-individuation*」の概念を説

みかえることで、独自のメディア・コミュニケーション論を展開した。そこでは意識は、外在化された記憶（痕跡）に潜む「前-個体的なもの *pré-individuel*」を現勢化させる、個体化プロセスの突端として位置づけられる。意識や社会をめぐる個体化に関するシモンドンの議論が、具体的な記憶／記録環境としての技術的諸条件のなかに明確に置き直されるのだ。

最終的には、記憶をめぐる物質的配置と節合するそのつどの意識の「今」において、記憶の「固有言語的な *idiomatique*」織物として出現する特異性の可能性を提示したい。そのことによって、技術的に媒介された意識を通して特異性が連鎖していくという、特異性のエコノミーの姿が浮かび上がるはずである。

「生産」の可逆性——バタイユにおける「一般経済」と消滅の技法／大池惣太郎（東京大学）

人間が自己にとっての功利性と有意味性の内部でしか思考しなくなることを常に批判し続けたバタイユは、戦後の主著『呪われた部分』（1949）において、自閉したエゴイズムの対極として、余剰な富を消費することを社会の潜在的な目的と捉える「一般経済」（*économie générale*）を唱える。「呪われた部分」の理論として知られるこの思想は、祝祭的な「非生産的消費」の機能を説明した経済理論などではなく、何よりも「富」や「有用性」を消費されるべき「負債」とみなすことで功利性に基づく現実原則を反転させる、ニーチェ由来の価値転倒の試みであった。「一般経済」は、いわば富の生産と蓄積への志向とは逆転した視点において捉えられた世界の秩序^{エコノミー}なのである。

バタイユの「一般経済」が持つ「視点の逆転」という側面は、多くのバタイユ研究においては見落とされている。それに対し、バタイユの異質なまなざしを継承し展開されたのがジャン・ボードリヤールの仕事である。彼は主著『象徴交換と死』（1976）においてバタイユを、「死」を再び経済の中に取り入れることで「価値の象徴的取り消し」を論じた稀有な思想家として高く評価している。本発表では、バタイユとボードリヤールの思想的連関性を明らかにしつつ、ボードリヤールの視点から「一般経済」の射程を再考する。その作業を通じ、われわれの社会が根本的に欠く別種の社会原理の素描を試みたい。

構造転換の可能性——ラカンにおける「四つのディスクール」の哲学的規定にむけて／荒谷大輔（江戸川大学）

「享受せよ」という無意識の指令を、資本主義体制における主体は、個的主体の趣味的な消費へ移し替え、そのことによってシステム内に自らの位置を得る。だが、そうした消費社会の主体は、ラカンによれば、生産手段としての知（ノウハウ: *savoir-faire*）を稼働させて剰余を産出しながら、手の先から零れ落としてその享楽をシステムに受け渡す。よく知られるようにラカンは、欲望の構造化において機能する四つのエレメント（S1, S2, a, S barré）の配置によって規定される四つのディスクールのうち、資本主義のディスクールととりわけ親和的なものを、「主人のディスクール」に見たのであった。

本発表では、しばしば、ラカンのテキストだけを根拠に上滑り的に語られるこうした説明図式の妥当性を、哲学の歴史的文脈と社会的現実性に照らして検討しつつ、ラカンの語るディスクール間の転換の可能性について考察したい。コジェーブ経由で参照されるヘーゲルの主奴の弁証法は、そもそも、市民社会的な主体の形成を論理的に記述するための図式であったが、それは実際、資本主義社会における主体の有り様を跡づけるものでもあった。ラカンにおける市民社会論の精神分析的読み替えを辿り直すことで、構造が変化する可能性の糸口を探っていきたい。

【コメンテーター】佐藤嘉幸（筑波大学）

【司会】大橋完太郎（東京大学）

14:00-16:00 研究発表（午後1）

研究発表4：表象の来歴——思想史をプリズムとして

表象の概念が、その豊かな意味内容をつうじて、複数の学問領域を媒介する貴重なインターフェイスとなりうることは、本学会を中心としてこれまで生み出された数々の学術的成果によってすでに確認されている。では、この豊饒さを歴史へと送り返すとき、そこで見えてくるものは何か。

本パネルでは、西欧芸術論にとって範例的な位置を占める古典テキスト——アリストテレス『詩学』、キケロ『発想論』、偽ロンギノス『崇高論』——が後期中世から初期近代に潜り抜けた再解釈のプロセスを検証し、表象とその関連概念との分節を思想的に解明することで、上記の問いに対する答えを探りたい。表象という概念の豊穡さは、思想史的な観点からすれば、創造と模倣、制作と認識、また表現と強勢といった芸術論上の基礎的な問題構成においてこそ、もっとも十全に示されている。「表象」の原語として一般に措定される *repraesentatio* については、森元発表がスコラ学によるアリストテレス読解を対象としながら、重点的に検討をおこなう。また、星野発表は、ギリシア語からラテン系諸語への文脈移動を念頭に置きつつ、表象・想像・虚構という概念間の分節点の一端を、ボワローの『崇高論』翻訳を手がかりとして明らかにする。これに対し、岡本発表は、「模倣」の概念がひとつの臨界に到達する局面を、ブルーノによるキケロ再解釈のうちに探りながら、表象概念に固有の輪郭を逆照射することをめざす。以上を通じて、表象という概念の豊穡さを湧出させているそのたえまない理論的再編の動勢を捉えることが、発表者一同の課題であり、願いでもある。

スコラの詩学——トマスによるアリストテレス読解を中心に／森元庸介（日本学術振興会）

通念によれば、西欧におけるアリストテレス『詩学』の受容はルネサンスに始まるとされている。だが、すでに中世にあって、アヴェロエスによる註解のラテン語訳をつうじて『詩学』はスコラ学に流入し、周縁的にはあれ知られ、かつ論じられていた。とくに、トマス・アクィナスは、忌むべき対象の模倣による昇華を論じて名高い第四章の記述を複数の文脈において参照し、人間の自然な性向としての模倣の快について考察を加えている。この読解の特性を考えるうえで注目されるのは、ギリシア語 *mimêsis* に対して *repraesentatio* の訳が充てられたという事実である。アヴェロエスの訳者ヘルマヌス・アルマヌスからトマス、そして後代のスコラ学者たちに受け継がれたこの選択は、*mimêsis* に *imitatio* の訳語を充てたルネサンスの文献学者たちのそれとは明白な対照を成している。ここに、スコラ学に固有の『詩学』理解を看取することは可能なのか。模倣の快を比較の快と強く関連づけ、藝術の快を心的な操作の相関項として定義したアヴェロエスの立論を踏まえながら、キリスト教思想のなかで、従来は避けるべき遊興 (*ludus*) と考えられた演劇、ひいては演劇が代表する藝術の相対的復権の端緒を跡づけるとともに、この復権が知的対象としての藝術理解とどのように相関するのかを検討したい。

ジョルダナーノ・ブルーノにおける自然と芸術——ゼウクシスの描くヘレネの肖像の逸話から／岡本源太（京都造形芸術大学）

画家ゼウクシスは、クロトンの五人の乙女からそのもっとも美しい部位を選び集め、このうえなく美しいヘレネの肖像を描いたという。おもにキケロの口からルネサンスの西欧に伝えられたこの逸話は、芸術が模倣すべき規範の寓意として語り継がれていた。ジョルダナーノ・ブルーノもまた、いくどかこの逸話に触れている。しかしながらブルーノは、模倣すべき規範については沈黙する。ブルーノによれば、この逸話が示しているのは、創造の根源の認識不可能性であり、また自然の美の多様性なのである。

ブルーノの沈黙には、近代の黎明にあって「芸術」概念が被った転位が、示唆されているだろう。この転位はもちろん、「模倣」から「創出」へという、いくぶん言い古された定式に押し込めることも可能である。規則が詩を生むのではなく、詩が規則を生み、したがって真の詩人の種類だけ真の規則の種類があるという、『英雄的狂気』(1585) での名高い議論は、まさにこの定式を確認しているかに思える。だが、このとき重要なのは、芸術が模倣ではなく創出として捉えなおされていくなかで、自然と芸術をめぐるブルーノの特異な思索が語り出されていることである。その内実を、本発表ではブルーノの語るヘレネの肖像の逸話のうちに探っていきたい。それにより、近代の黎明に芸術と模倣との結びつきが自明でなくなったとき、その根底で生じていた転位の一端を明らかにできるだろう。

崇高論の「発明」——ボワローの『崇高論』翻訳・注解における「表象」の問題を中心に／星野太（東京大学）

修辞学における「崇高」概念の起源であるとされる偽ロンギノスの『崇高論』は、1554年のギリシア語版の刊行、およびそれに続く複数の翻訳・注解の刊行を経て、広く西欧に伝播することになる。なかでも、

本書の受容を決定的なものにしたのは1674年のニコラ・ボワローによる仏訳（『崇高論、あるいは言説における驚異的なもの』）である。ボワローによるこの翻訳は、フランスのみならずイギリスをはじめとする諸外国にも多大な影響を及ぼすに至り、その後約一世紀にわたって『崇高論』の範例的な翻訳として扱われることになる。

とはいえ、しばしば指摘されるように、このボワローの翻訳は原文のギリシア語に忠実なものでは決してない。章立ての改変、および原文には見られない表現の挿入は言うに及ばず、序論においては「崇高le sublime」と「崇高な文体le style sublime」という、原文にはまったく存在しなかった区別までもが導入されている。さらに、ギリシア語の「表象phantasia」をめぐるボワローのいささか屈曲した理解は、後世の偽ロンギノス受容について考える上で看過しえない内容を含んでいる。本発表は、この『崇高論』の翻訳および注解を検討することを通じて、そこで表象・想像・虚構といった諸概念がいかに規定され、分節化されているかを明らかにしたい。以上の作業を通じて、初期近代における崇高論の「発明」の一端を提示できれば幸いである。

【コメンテーター】岡田温司（京都大学）

【司会】森元庸介（日本学術振興会）

研究発表5：モデルとしての建築

西洋建築史において建築図面は、建造物を文字通り実現するための手立てのひとつであった。必要とされる情報を組織化し、体験を構造化することが建築術であるとすれば、その工学的操作に潜在している認識の枠組みこそが、逆説的にも多彩な建築術を算出してきたとあってよい。18世紀西洋における廃墟の美学に置かれた賭け金は、建築の理念が物質化される際に立ち現れる複層化された時間の情動的経験にほかならない。では、建造物それ自体が展示（＝知覚）されるプロセスに介入する時間の契機とはいかなるものか。アロイス・リーグルは建造物の時間の位相を経年価値と歴史的価値との関連のうちで論じたが（『現代の記念物崇拜』、1903年）、彼にとって建造物とは、人間の意志と行為によって基礎づけられた統一体としての実体であった。この19世紀的な図式は20世紀の初頭に、素材（＝ミディウム）の物質性それ自体への欲望へと収斂していく。かくして建築ドローイングは、建築プロジェクトの素材としても、建築をモデルとした芸術のジャンル（＝メディア）としても、その特性は規定されなくなる。1925年にはパリの万国博覧会において地域主義と機能主義が合理的かつ政治的な仕方で達成されたが、実のところ、1920-30年代のル・コルビュジエとロトチェンコの営みとは、感情を可能にする技術を構築することであった。本パネルが問い直すのは、これらの構成されたシステムに同時に偏在する感情（アフェクション）の様態である。

建築の曝け出された臓腑——18世紀後半の廃墟表象における瞬間性と暴力性について／小澤京子（東京大学）

瞬間的な破壊の結果生じた廃墟の表象が、18世紀後半には描かれ始める。その背景には、戦争や革命などの動乱がある。これらの廃墟表象は、人為的な暴力によって瞬時に出来たものであるにも関わらず、その構図や描画技法においては、17世紀以来の「廃墟趣味」の伝統を受け継いだ、「美的」なものである。例としては、プロイセン軍の爆撃によって崩壊したドレスデンの教会（ベルナルド・ベロット）や、フランス革命によって今まさに炎上しつつある監獄（ユベール・ロベール）などを挙げることができる。

18世紀の西欧で興隆をみた廃墟趣味は、基本的には歴史的な遺跡にまつわるものであり、さらにはディドロがその廃墟論で称揚したように、廃墟の上を流れた長大な時間や遠い過去に想いを馳せるものであった。廃墟と結合する感情とされるメランコリーやノスタルジーも、この「時間的遠さ」からもたらされる。このような静的な廃墟趣味と、上述のいわば「瞬時的廃墟表象」とでは、体現されている時間性がまったく異なっている。後者に存在しているのは、悠久の時間が刻む痕跡ではなく、カタストロフィックな暴力性の爪痕である。そこでは、瞬間的・個別的な暴力性の体験や記憶と永続的・普遍的な審美性が、奇妙にも共存している。

本発表では、暴力性と瞬間性という二つの契機を孕んだ建築表象に体现をみた、18世紀後に先鋭化する時間意識——時間の永続性・継続性への危機意識、「瞬間」や「断絶」の発見——を炙り出し、分析を加えたい。

建築的アトピア——「デ・ステイルグループの建築家たち」展、エフォーール・モデルヌ画廊、パリ、1923年10月／米田尚輝（国立新美術館・跡見女子大学）

ル・コルビュジエが『建築をめざして』（1923）の中に、オーギュスト・ショワジエの著作『建築史』（1899）から借用した軸即投影図を挿し込んだことはよく知られている。軸即投影の描き方それ自体は、19世紀にはすでに初等デッサン教育として法制化されている。例えばヴィオレール＝デュクはこれを芸術家の養成としてではなく、観察の記録方法として普及させた。その結果、芸術的デッサン（人体を基本としたアカデミックなデッサン）と技術的デッサン（工業社会に対応する幾何学デッサン）が複合化される。しかし実のところ、建築学における幾何学教育としてしか認識されていなかった軸測投影の美的効果がより積極的に展開されるのは、1920年代フランスの画家たちによってである。

本発表では、1923年10月にパリのエフォーール・モデルヌ画廊で開かれた「デ・ステイルグループの建築家たち」展に照準を定め、軸測投影が1920年代に絵画表現の領域に導入される諸相を分析する。この展覧会は、軸測投影の性格が観者に要請する多義的な知覚の様態が、建築、絵画、写真といった多様なメディアと通じて1920年代の近代美術の文脈に顕れたこと、そしてオランダの美術家テオ・ファン・ドゥースブルフを中心としたデ・ステイルの建築と絵画が初めてパリの前衛芸術に介入した、という2点において重要である。ファン・ドゥースブルフが絵画と建築の調和的な統一へ向けて、軸即投影の表象システムを変奏していく一方で、絵画と建築との無媒介的な融合を拒むル・コルビュジエとの影響関係を明確にした。

人間を設計するためのプラン——アレクサンドル・ロトチェンコの構成主義デザイン／河村彩（早稲田大学）

ロシア構成主義は、バウハウスやデ・ステイル、アール・デコと並び、機能性という美学に基づいた近代デザインの一潮流とみなされているが、工業製品として実際に実現されたものは限られている。だがそれは、そもそも構成主義が製品というハードウェアの側面ではなく、情報や人間の認識といったソフトウェアの側面に焦点をあてていたことに起因するものではなかったか。本発表では、構成主義が事物を生産することよりも、むしろ事物と人間との新しい関係を提示することによって、人間の方を新しく創造することを志向していたことに注目する。構成主義のさまざまなプランは、芸術という枠組みを超えて、人間の認識や感情に働きかけるためのモデルとして機能していたことを明らかにする。

本発表で焦点をあてるのは、アレクサンドル・ロトチェンコによる1920年代の活動である。ここでは彼のデザインした家具、1925年のパリ万博で発表された労働者クラブ、そして舞台や映画のセットをとりあげ、それらが社会主義社会における合理的な新しい生活モデルとして提示されたことを明らかにする。また、広告や組写真を用いたパンフレットを通して、ロトチェンコが描いた便利で快適な近代的都市生活のイメージを考察する。注目すべきことは、これらの仕事が芸術や単なるプロパガンダを超えていたということである。ロトチェンコは、新経済政策（NEP）を背景に、多様なメディアと手段によって、平面と立体、マテリアルと情報、オブジェと表象の区別を超えながら、人間の認識に働きかけようとした。

【コメンテーター／司会】松浦寿夫（東京外国語大学）

研究発表6：〈映画〉と多層化するコミュニケーション——20世紀前半のアメリカ映画、そして満州映画

映画製作という、複数の人間の共同作業によって進められる営為は、様々な水準の人的交流をもたらす。それは、撮影スタジオ内における俳優や技術スタッフ等を中心としたごく一般的ものから、産業構造の変化によってもたらされる異業種間におけるもの、あるいは政治的要因によって、複数の国の間で取り結ばれる人種間・民族間の交流に至るまで多岐に渡る。こうした交流の網目の結節点として生み出されるものが映画であるとするならば、そこにはこれらの諸力の錯綜関係が多種多様な種類の表象として現れること

になる。

本パネルにおいては、以上のような視座から、映画を、諸力の交流をもたらす場としてとらえ、生成される表象に織り込まれた諸力の関係を読み解くことを通して、映画作品や映画史に関する新たなアプローチの可能性を探る試みがなされる。そこで採り上げられるのは、1910年代後半から1920年代にかけてのアメリカ映画界におけるエーリッヒ・フォン・シュトロハイムの活動の事例、東京国立近代美術館フィルムセンター企画上映を通して見る1930年代のアメリカ劇映画、そして1940年代前半の満州における五族協和思想のプロパガンダ映画である。各事例は、各々地域、時代を異にしているが、ある既成の表象システムが、異質な存在との交流を媒介になんらかの変質を経験している点で共通している。各発表によるそれらの変質の諸相へのアプローチを相互に検討し、表象を解釈する新たな可能性を探ることが本パネルの目的である。

劇場化される映画史と映画作家、それらの表象を越えて——無声期アメリカにおけるエーリッヒ・フォン・シュトロハイムを例に／後藤大輔（早稲田大学）

アメリカにおける初期の映画史は、産業の発展に貢献した個性的な人間達の諸関係が織り成す一種の「劇場」として表象されるのが通例であり、こうしたジャーナリスティックな性質を有する映画史的表象は、‘great man theory’として以後の研究者によって批判の対象とされた。しかし、研究史が長期に渡る無声期の映画作家研究を行う上では、こうした「劇場化された映画史」の表象は一方的に排除されるべきではなく、むしろ旧来の映画史的表象の臨界点を示したのものとして捉えることで、新たな歴史的解釈の経路を導出することが可能になる。

1910年代後半から1920年代にかけてのアメリカ映画産業で活躍した映画監督エーリッヒ・フォン・シュトロハイムは、製作会社の管理体制との間で数々の軋轢を反復しながら、センセーショナルな内容の監督作品を発表し続けた。だが、彼のキャリアの諸相は、「芸術家」と「産業」との間の二元論的対立が展開する劇化された表象へと置き換えられることが多かった。そこで本研究発表では、まず、彼をめぐる還元論的な映画史的表象の諸性質とその限界を明らかにする。次に、そうした諸特徴と、一次資料、同時時代の批評、新旧の研究者による諸見解、製作システムに関する研究のような様々な言説等とを、歴史的に相互に関連させる分析を通じて、従来の閉ざされた映画史的表象に新たな対話的・コミュニケーションの契機を与えることを試みる。

フィルム・アーカイヴにおけるインター・コミュニケーションのケース——東京国立近代美術館フィルムセンター1930年代アメリカ映画上映企画を通して／檜山博士（東京国立近代美術館フィルムセンター）

東京国立近代美術館フィルムセンターは、所蔵するアメリカ映画の16mmプリント・コレクションの調査成果を公開する形で、2008年から毎年度末に計3回の上映会を催し、1930年代作品を中心に、1927年から1942年までのコレクションを概観する試みを行なった。当企画を進めるにあたっては、以下のような条件により、アーカイヴでの通常のカタロギングとは異なる調査作業が求められた。

まず、歴大な要素が錯綜するこの期間のアメリカ映画を、多分にランダムな性質をもつ同コレクションに即して概観するべき点。次に、予め企画上映を行うことを前提に調査を進めるべき点。そして、上映にあたって、1930年代のアメリカ映画の歴史的展開をふまえつつ、コレクション独自の特性を示すべき点、などである。作業は困難だったが、日本未公開作も含め、上映機会の乏しい多くの作品を紹介でき、好評を得たことで一定の役割が果たされた。

本パネルでは、3回の上映サイクルを終えたことを契機に、企画全体の意図や開催意義などを問い直すと共に、作品の企画・上映という側面から、映画がもたらす別のコミュニケーションの形式を分析する。上記の諸条件は、複数の主体・言説・フィルム・観客のインター・コミュニケーションを生み出し、その成果は随時調査作業の方針に反映されていった。この一連のプロセスを分析し、それらのコミュニケーションのあり方を検証する。

満州映画協会による「啓民映画」に見る異文化コミュニケーションの表象／劉文兵（早稲田大学）

本発表は、一九三七年に発足した日本の国策映画製作機構だった「満州映画協会」により、敗戦直前まで製作されつづけた「啓民映画」（文化映画）を研究対象とする。「建国」以来の満州国の歩みを記録するもの、「満人」に「八紘一宇」の精神を叩き込むという啓蒙目的のもの、そして日本人に満州移民を呼び掛ける目的で制作したものなどが、「啓民映画」の主なジャンルを形成している。従来の日本映画史の記述において、啓民映画はたんなるプロパガンダと見なされ、学術的な検証はほとんどおこなわれてこなかった。また、中国においては、啓民映画の存在自体がカテゴリーとして認知されず、結果的に全否定されているのが現状である。そこで、本発表は、傀儡国家でありながらも、イデオロギー的には「五族協和」を標榜していたという満州国が抱える複雑な問題、とりわけ「日系人」と「満人」とのコミュニケーションという根本的な問題に着目する。すなわち、満州国の政策がたんなる宗主国側からの押し付けではなく、被植民者側の自発性に依るものでもあったという《事実》を仮構するべく、現実には存在するはずのない透明なコミュニケーションという幻想が、執拗なまでに提示されるという「啓民映画」の特徴的な側面を浮き彫りにすることをつうじて、満州国にたいする批判の視座を提供することを試みる。

【コメンテーター】中村秀之（立教大学）

【司会】門林岳史（関西大学）

16:30-18:30 研究発表（午後2）

研究発表7：なぜ罪か——その言語使用と理由をめぐって

フーコーが近代性を「人間の死」と評して以来、彼以前に盛んに論じられてきた道徳的「意識」もまた、暗黙の前提の地位を放逐された。つまり、罪責性の共有を前提したうえで共同体を論じる立場は相対化され、また罪責性それ自体も概念としての実効性を失っていると見なされるようになった。ただその一方で、法的言語空間の基底材としての「罪」は、今日なお機能しつづけていると見受けられる。しかし、「罪」は当該共同体の規定する広義の「法」の侵犯行為へと還元されるだろうか。あるいは逆にこうも問える、「罪」のいっさいを括弧入れしたうえでなお共同性を思考できるとまでは言いきれないのではないかと。

そこで本パネルでは、「ポスト罪意識時代の罪」を改めて問題化するための基礎的考察を試みる。より具体的には、罪意識がそれとして抱かれること自体を可能にする「罪」の原理的先行性をめぐって、その言語的機構としての諸特性を検討対象とする。

ただし、この巨大な問題をめぐる議論の蓄積は膨大であり、また時代、地域、論者ごとに議論は多様なコンテクストを内包しているため、本パネルでは、近現代西洋思想史から三人の議論を召還し、順次検討するという方針をとる。まず飯田は、ルソーにおける「罪」の前提を形成する「自分自身との対立」という事実性を、自伝的テキストの分析を通じて明らかにする。ついで茅野は、神話的な罪の連関に歴史性を導入するというベンヤミンの方法を、「根源」に着目しつつ考察する。そして柿並は、フロイトが「発明」したとされる欲動の神話、そしてそのナンシーによる再解釈をめぐって、罪意識の論議可能性を検討する。

「罪」と「対立」——ルソーの自伝的なテキストに見られる「罪」の語とその使用理由／飯田賢穂（東京大学）

本発表の主題は、「罪」という言葉をめぐって展開するジャン・ジャック・ルソーの論が、「自分自身との対立」と表現される一つの事実を前提として成立していることを明らかにすることである。このことは、1762年前後に書かれたルソーの自伝的なテキストを分析することで明らかになる。

ルソーは、1755年以降、自伝を書くためのメモを少しずつ書き始める。この頃から、彼は、著作活動の一貫性のなさを周囲から非難され始めていた。この非難は、ルソー本人に自身の分裂と統一性という主題を与えた。こうした問題は、1762年に出版された『社会契約論』と『エミール』の二著作に対してなされたフランスとジュネーヴによる弾劾とルソーに対する逮捕令を契機として、自伝的な著作へと結晶してゆく。

以上の経緯を背景とし、本発表では、まず『告白（ヌーシャテル草稿）』（1764）の「序文」を分析し、そこから自身の統一性の根拠として、「魂の歴史」が読者に対して提示されようとしていることを確認する。ついで、過去に自分に起こった出来事を想起するという「歴史」記述の方法が、この統一性を保証するどころか、皮肉にも「魂」の分裂を明らかにしてしまうという事態に光を当てる。その際、『エフライ

ムのレビ人』(1762)という、神話の形式を使って書かれた自伝的なテキストを基に、ルソー本人が自身の分裂を「罪」という言葉を通して把握しようとしていたことを明らかにする。

罪の根源——W・ベンヤミンにおける罪と歴史／茅野大樹（東京大学）

ヴァルター・ベンヤミンは1910年代半ばから20年代半ばにかけての一連の著作群の中で、一貫して運命、神話、法といったモチーフと共に罪の問題を論じているが、その際に言及される罪は、行為による倫理的な過失ではなく、一切の行為と無関係に人間の生に必然的に伴う罪（「被造物的な罪」、「自然的な罪」）のことである。こうした罪の思考は、それ自体で閉じた神話的な因果連関における不変の現実として罪を捉える、原因論あるいは運命論として特徴付けられる。とはいえ、ベンヤミンがバロック悲劇の考察に歴史性を導入したことの意図は、諸々の現象を歴史的存在として、つまりは潜在的に生成の可能性を孕んだものとして捉えることであつたといえる。というのも、ベンヤミンは『ドイツ悲劇の根源』（1925）において、生成と消滅を繰り返す歴史性を孕んだカテゴリーとして「根源」を捉えることで、あらかじめ想定された起源によって原因論的に罪を根拠付ける思考とは別の思考を示唆していたからである。このことを踏まえ、本発表においては歴史において未だ成り来たっていない、潜在的なものとして留まっている「根源」が持つ、形成の力について考察することに重点を置きたい。その際にはベンヤミンが歴史の時間を一種の「中間形式」として、それ自体としては閉じることのない、別の形式への「移行点」として捉えていることに留意すべきだろう。

途絶した神話の再開？——キリスト教の脱構築と精神分析／柿並良佑（東京大学）

自らの哲学的営為において精神分析と取り組んできたジャン＝リュック・ナンシーは、『キリスト教の脱構築』の第二巻である『崇拜』（2010）の最後に収められた小論において、フロイトの「欲動理論はいわば精神分析の神話である」という一節をとりあげている。すでにナンシーは『無為の共同体』（1986）に収められた「途絶された神話」において、共同体の創設行為としての神話の、近代における「最後の発明者」たるフロイトに言及していたが、そこでの神話は途絶・中断すべきものであつた。これに対し『崇拜』では、フロイトは「神の死」以後最も重要な思想家として参照される。フロイトの発明とは欲動という神話の創設であり、それは科学も宗教も与えることのできない人間の起源を、「物語」によって説明することである。ナンシーはフロイトの言う欲動すなわち運動的なものを存在と等置し、起源においてつねに駆り立てられている人間という観念を提起することで、起源という観念そのものを脱構築しようとする。以上の文脈を踏まえ、本発表ではまず二つのテキストにおけるフロイトならびに神話の位置づけの変化を明らかにする。ついで、共同体論では原父の殺害は共同体の統合ならびに成員の〈父〉への同一化と結び付けられていたが、この殺害から引き起こされる罪の意識が、キリスト教の脱構築——救済という装置の消失——という文脈ではどのように扱われるのかを検討したい。

【コメンテーター】宮崎裕助（新潟大学）

【司会】三河隆之（日本学術振興会）

研究発表8：初期アメリカ映画のストラテジー

70年代末から80年代にかけて、初期映画史の書き直しが行われ、20世紀初頭の映画の見世物的な側面に光が当てられるようになった。映画は作品として自律的に受容されていたのではなく、観客の合唱のための補助ツール、あるいは生身のパフォーマンスの合間に挿入される見世物として、多様な受容のコンテクストの中で様々な機能を果たしていた。

このような特質は、映画の「プリミティヴ」な段階とみなされ、物語る装置としての映画と対立的に位置づけられてきた。しかし、物語るという機能にとって非本質的であるとみなされてきた外部的・文化的なコンテクストや編集以外の遊技的要素は、物語の傍らで物語とともに表象を構成し、積極的に観客を巻き込んでいる。そうした複雑な表象のプロセスは、古典的な意味での演出ともメディアの自律性を保証する技法とも異なる、フィルムに書き込まれた「戦略＝ストラテジー」と捉えることが可能である。

とりわけアメリカの初期映画は、固有の歴史的コンテクストと切り離して考えることはできない。映画の登場から物語映画の生成期にかけてのアメリカは、工業国への転換を経て大規模な消費社会を実現しただけでなく、フロンティアの終焉を契機に国家の時間的・空間的境界線の意識を大きく変容させつつあった。本パネルは、そのような歴史的コンテクストを一種のプリズムとして重ね合わせることで、編集技法に留まらず、身振りの演出や映画前史的なメディア形式にまで浸透している、複雑なストラテジーを浮上させることを目的としている。

アメリカにおける映画前史としてのムービング・パノラマ興行と『ポトマック川下り』／渡部宏樹（東京大学）

本発表では1917年の『ポトマック川下り (Down the Old Potomac)』を具体的な検討の対象として、映画の表象の中に流れ込んでいる19世紀の視覚文化の影響を明らかにしたい。

『ポトマック川下り』はワシントンDCにそそぐポトマック川を下る船からの光景を提示する単調なフィルムであり、モンタージュを初めとする物語る技巧の洗練という観点から考えたときに重要なものであるとは言えない。だが、船上からの光景という主題は19世紀にアメリカで流行したムービング・パノラマと呼ばれる視覚文化装置に顕著なものである。ムービング・パノラマとは高さ2~3メートル、横幅数百メートルの画布に描かれた絵を額縁型の枠の中で横方向にスクロールさせながら少しずつ提示するものであり、興業形態という観点からは映画の先行者の一つであると言える。このような水平方向の移動に特化したメディアにとって船上からの光景は非常に適したものであり、初期の映画製作者の想像力がムービング・パノラマの主題に負っていたものは少なくない。

このようにムービング・パノラマの興業形態・メディア的特性・主題との連続性という観点から『ポトマック川下り』を検討することで、この一見凡庸に見えるフィルムがいかに戦略的にアメリカの歴史を提示していたのかを明らかにし、映画前史と映画史の接続の試みの一例としたい。

アメリカ初期／古典映画における情動のコンテクスト——『国民の創生』を題材に／難波阿丹（東京大学）

本発表では、D・W・グリフィス『国民の創生』を題材に、アメリカの初期および古典映画と、大衆の想像力を煥発する、情動喚起の技巧について考察する。同作は、編集技術の高度な達成によって、古典的ハリウッド映画の文法、すなわち、映画が演劇を始めとする他の隣接媒体の影響に抛らない、自律的な語りシステムを獲得した作品と考えられている。特に70年代末から80年代に活発に行われた映画史の書き直し作業では、初期映画から古典映画への単線的な発展ではなく、初期映画の歴史・文化的なコンテクストおよび、非物語的な要素に注目し、編集技法の有無に集約されない複雑多様な視聴覚の回路が検討されてきた。

しかしこれらの試みは、1910年代以降の映画作品群に関して、「注意喚起の映画」を抑圧する「古典映画」の「物語性」の目的論的發展を温存しているともいえるだろう。本発表は『国民の創生』を「物語映画」の文脈でとらえるのではなく、観客を積極的に映画の時空へと巻き込んでいく、微細な身振りの演出や、アメリカ大衆文化史および社会史的背景を反映する、映画の複雑なストラテジーを浮上させることを目指したい。よって、第一に第一次大戦下のアメリカ社会が内包する諸問題を検討することで、『国民の創生』が喚起する情動的反応の社会的・文化的なコンテクストを明らかにし、第二に、細かな情動喚起の技巧が、いかにして大衆の想像力を形作っていったかを焦点とする。

Edwin S. Porterによる「アメリカ」映画の発明と世紀転換期アメリカ像の再創造／中垣恒太郎（大東文化大学）

Edwin S. Porter (1870-1941)は、『アメリカ消防夫の生活』(Life of an American Fireman, 1903)、『大列車強盗』(The Great Train Robbery, 1903)において、「クロスカッティング」「クローズアップ」の手法を導入し、新しいメディアである映画、中でも物語映画の表現技法とその可能性とを飛躍的に発展させた功績により、アメリカ映画史におけるパイオニア的存在に位置づけられる。とりわけ『大列車強盗』は、西部フロンティアの想像力を、映画のジャンルに定着させ、西部劇というジャンルを産み出す原動力となったことから、Porterは初期アメリカ映画を象徴する存在であり、カメラに向かって強盗が発砲する有名なショット

は、見世物と虚構／物語との間の境界線に対する自覚、当時の映画を取り巻く状況をも端的に示している。本発表ではアメリカ文化史におけるPorterの位置を再定義すると同時に、彼の作品が物語映画のアクチュアリティを模索していく背後において記録しえた世紀転換期アメリカの時代思潮を読み込んでみたい。世紀転換期アメリカはまさしく映画技術を含むテクノロジーの変革期であり、アメリカが国力を増していく只中であり、新旧の価値観が混在する混沌の時代でもあった。過去に対するノスタルジアと未来に対する明るい希望とが交錯していく中で、映像の原風景とでも称すべき、20世紀アメリカ大衆文化のエッセンスがどのようにして生成していったのか、フィルムの背後に見出せる様々なイデオロギーを媒介に、世紀転換期アメリカの姿を再創造してみたい。

【コメンテーター】板津木綿子（東京大学）

【司会】 島山宗明（東京大学）

研究発表9：表象文化論としてのエピステモロジー／エピステモロジーとしての表象文化論

表象文化論の研究対象が仮に、何らかの文法、概念を備えた媒体あるいは言語を通して対象を再現する行為であるとすれば、科学もまたすぐれて表象再現の一つであると言えるのではないか。たとえば数学は、いくつかの公理を出発点に厳密な推論形式により、対象世界を構築している（それが完全に閉じた形式でないにせよ）し、物理学とともにわれわれを取り巻く世界の様々な現象を記述するために重要な役割を果たしている。一方で、自らの言語を分析する言語（集合論、数理論理学から圏論、ホモロジー代数にいたるまで）を展開してきた。こうした作業は、文学や絵画などにおける同様の展開と並べて論じるに値しよう。そのためにわれわれはまず数学や物理学の言語をわれわれの言葉に翻訳し、共有しなくてはならない。エピステモロジーとはそうした翻訳の試みに他ならない。フレーゲ、ウィトゲンシュタイン、カルナップ、クワイン、パットナム、そして近年のファン・フレーセン、ナンシー・カートライト、さらには量子重力や超弦理論をめぐる物理学者たちの議論等々、主として英語圏の分析哲学については良く知られているが、フランスにおいてもまた、ガストン・バシュラルからジャン・カヴァイエス、アルベール・ロートマンを経て、カンギレム、フーコー、ジュール・ヴィユマン、ジル・ガストン・グランジェといった哲学者達がそうした試みを続けてきた。そうしたフランスにおける科学論の試みを表象文化論の一つの領域として論じることで逆に表象文化論の方法論を見直す機会ともなるのではないかと期待する。

フッサールからカヴァイエス、フーコーへ——超越論的科学哲学の運命／松岡新一郎（国立音楽大学）

本論では、フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』および、『幾何学の起源』が、フランスにおける科学論、とりわけジャン・カヴァイエスとミシェル・フーコーのそれに与えた影響を考察する。フッサールのこれらの著作が最初に反響を得たのはフランスにおいてであった。とりわけ、『幾何学の起源』は1939年にすでに *Revue internationale de philosophie* 誌に注釈付きで掲載されている。それが後のジャック・デリダによる詳細な解説を伴った翻訳刊行つながったことは良く知られているところだ。しかしながら、こららの著作がガストン・バシュラル以降のフランス科学史、科学哲学、とりわけジャン・カヴァイエスによる科学の発展をめぐる論理的な考察に与えた影響はこれまでのところあまり議論されていない。カヴァイエスからカンギレム、そしてミシェル・フーコーへと連なるフランス科学論の系譜をたどり直す作業を通し、フッサールの先駆的な著作のどのような部分が受け継がれ、一方でどのような部分がいかなる事情から否定されるにいたったのかを明かにすることで、フランスの科学論をより広い文脈の中に置き直すことも可能となるであろう。

フランス・エピステモロジーの系譜とミシェル・フーコーの方法論／阿部崇（青山学院大学）

フーコーがある論文中でフランス哲学のうちに「認識の哲学」と「概念の哲学」という二つの系譜を見出し、その後者の系譜のうちに自らを位置づけていたことはよく知られている。フーコーはどのようにサルトルやメルロ＝ポンティらによる「主体の哲学」を批判し、カヴァイエスやカンギレムの系譜に連なる思考をどのようにイメージしていたのか。本発表では、フーコーが現象学的な「主体の哲学」をいかに批判したか、という点を確認するだけでなく、それを乗り越える「概念の哲学」を自らの思考のプロジェ

クトのうちでどのように実現しようとしたのかを考えてみたい。フーコーの「アルケオロジー」という方法論の生成と変化のうちに、そうした「概念の哲学」の企図を見出すことができるのではないか、というのが私の提出したい仮説である。そしてそれが、フーコーの思考が「フランス認識論」の系譜に紛れもなく位置づけられることを明らかにしてくれるのではないか。

「19世紀医学」をめぐるカンギレムとフーコーの対話／田中祐理子（京都大学）

フーコーが自らを「概念の哲学」の系譜に位置づけた論文を捧げた対象であるカンギレムは、論文集『生命科学の歴史におけるイデオロギーと合理性』の序言において『知の考古学』の著者に一つの疑義を呈した。それは19世紀フランスの医学史を特徴付ける二人の巨人、バルナールとパストゥールについての判断をめぐる問題提起をなす発言であり、カンギレムの論文「19世紀における『医学理論』の終焉への細菌学の効果」は、この両者の差異が認識論的水準でいかに決定的に医学の成立条件を変質させたかを論じている。この論文と上記の疑義とは、単に医学史的事実からのフーコーの「アルケオロジー」への批判としてではなく、むしろ同じ「概念の哲学」者が、より厳密に科学史の作業を通じて、概念に対する認識者の脆弱さを確かめた仕事として読める。本論ではカンギレムの議論とフーコーの『知の考古学』の図式の対照を手がかりに、「概念の哲学」たるフランス認識論の問題設定とその実践を観察できる一場面としての、「19世紀医学」の意義を論じてみる。限定された二人の医学史上の登場人物をめぐる、カンギレムとフーコーのそれぞれの議論の目的、そして両者間の異同を確認することで、フランス認識論と呼ばれる知的系譜の引き受けた課題を具体事例の中で跡付けるとともに、二人の哲学者を異なる道筋へと向かわせる思考上の差異についても探ることを試みたい。

【コメンテーター】橋本毅彦（東京大学）

【司会】松岡新一郎